「もとはこちら」の お話し

No.71 今月のテーマ　損をする人、得をする人

人世の為に
尽力する事は
結局は自分の為である

（平井謙次作　日めくり　カレンダーより　）

北原ゆり筆

今回も前回と同様、平井先生の勉強会から「損をする人、得をする人」というお話と、「子育ては、親育て」という二つのお話しをご紹介させて頂きます。

「損をする人、得をする人」

平成三年一月二十一日

人は自分のする事について、損だ得だと色々計算する。そして損だとなると不満に思い、次第にその事を止めていく様になる。

例えば、皆が一緒に使う場所があり、当番制で掃除をしているとする。ところが色々と都合の悪い人が出てきて、掃除に来られないという人が増え、最後にはとうとう自分一人しか掃除をする人がいなくなってしまった。

さてこういう場合、どういう風に考え、どういう様に行動すれば良いだろうか。

先ず普通にいけば、「どうして私だけが掃除をしなければならないのか」と不満に思う。そして皆で使う場所なのだから、皆で掃除をするのが当然ではないのかと、掃除に来ない人を心の中で責めるようになる。

そして「自分だって忙しいし、したい事や、やりたい事を放って来ているのだから、時間のやりくりが大変なのだ」と、愚痴が始まり、「聞けば、他の人はそれらしい理由を付けてサボっているのであって、中には堂々と遊びに行っているという人もいるではないか」と、怒り心頭に達し、揚句の果て、「自分も、もうやーめた！」となるのが多い。

誰もしないのに自分一人だけが馬鹿正直に掃除をするのは損だと思い、最後は、皆と同じにして何が悪いと開き直る。

そしてとうとう誰一人として掃除に来る人はいなくなり、皆、勝手気ままな事に時間を費やすようになる。

極端な場合は、その場所は汚れ放題となり、悪臭を放ち、見るに耐えない様な汚い場所となる。

歩くにも汚れていない所を探し、左足、右足、と置く場所を選んで足を運ぶ。

そして段々人はその場から遠ざかり、最後には誰も集まってこなくなる。

さて、ではこれと異なるもう一つの考え方、やり方をすると、どういう事になるだろうか。

「掃除をしに来るのは自分一人になってしまった。勿論私も忙しいし、おまけに体の具合も少し悪く、お医者さんとも縁の切れない私である。そのうえ、今どき珍しく子供が４人もいて、家には年老いた両親もいる。

しかしそんな中でどこまで頑張れるかだ。

他の人が掃除に来れないのなら、せめて私だけでもその人達の分まで頑張って、掃除をさせてもらおう。

普段なら三十分で出来る所だけれど、きのうの人の分まで合わせて、今日は一時間かけて綺麗に掃除をしよう」と、いつもより早く起きだして、一生懸命掃除をする。

自分が頑張った分だけ、間違いなくそこがきれいになると思うと、嬉しくなってつい歌なども口ずさんでしまう。

掃除をしながら、ここを使う人達の事をあれこれと考え、気持ちよく使ってもらう為にもっと出来る事はないかと、花を飾ったりもする。

朝早くに済ませてしまうから、誰もその人が早起きして掃除をしている事を知らない。

しかしいつ来てみてもこざっぱりと整理整頓されており、気持ちの良い場所である。

「ここに来ると、なんだかほっとする」と誰からともなく言い出し、集まれば会話がはずみ、笑顔があふれ、色々な新しい出会いも始まる。

さてこうした場合、誰からも感謝もされないのに自分一人だけで頑張っているこの人は、とても不幸な人だろうか。あるいはまた、不満に思い、もう止めてしまいたいと思うだろうか。

そんな事はない。

誰一人として、口に出して有難がってくれる人などはいなくても、この人は十分に幸せな筈である。

それは、他の人の喜んでいる姿を見る事、その事が何よりの喜びとなり、ねぎらいとなり、励みとなっているからである。

また自分のする事、ひいては自分の存在そのものの価値を、この人は無意識のうちにも十分に感じ取る事が出来るからである。

誰かの、或いは何かの役に立っているという実感は、自分の為にだけ何かをするという場合に比べ、それは何倍もの喜びに繋がってゆく。

自分が自分の為だけに何かをした時の喜びを一とするならば、例えば相手が十人なら、その喜びは十倍に、そして相手が二十人なら二十倍もの喜びを、この人は自分のものにする事が出来るのである。

自分の時間と体と能力をフルに活用して働く事によって、自分の喜びを皆の喜びに膨らませる事が出来るのである。

他の人が掃除をしようがしまいが、そんな事は関係ない。いや、他の人が出来ないのなら、なおさらその分も自分が頑張ってしようと思う心は、他人への思いやりに繋がり、表面的には自分というものを殺すように見えながら、その実、それは自分を一番に生かす結果となるのである。

「損して、得取れ」という言葉があるが、この場合の「損」とは、極々浅いところの損であり、得取れのこの「得」は、本当は人徳の徳である。この徳は決して金銭などでは買うことの出来ない高貴なものであり、それは目先の損得勘定に左右されるという様な浅いものではない。

そんな事よりも、もっともっと大切な「存在する自分」というものの、その自分の存在価値を高める事になる。

或いは、存在の意味を得た事になる。言葉を変えて言えば、なくてはならない人になるという事である。

居てもいなくてもどうでもいい人、或いは、居ればそれだけ他人の迷惑になるような人と比べ、一体どちらが幸せな人であろうかという事である。

一隅を照らす人、それは自分の目先の損得などを考えず、また人の評価に左右される事もなく、ただ、人の役に立たせてもらっている自分を、純粋に心の底から喜べる人である。そして、人の喜びを我が喜びに置き換えられる人である。

例えば公園の片隅などで、他人の捨てたゴミをそっと拾って持ち帰る老人などを見かける事があるが、こういう人も立派な「一隅を照らす幸福な人」なのである。

「子育ては、親育て」

平成三年二月四日

良い子を育てるという事は、育てる親自身が、良い親にならなければ出来ない事である。

ここで言う「良い親」とか、「良い子」などと言っているのは狭義の捉え方であって、それは師弟関係においても、またその他のどういう関係においても同様である。

自分が相手に対し、こうあってほしい、こんな人に育ってほしいと望むのであれば、当然のことながら先ず自分自身がそういう様にならなければいけない。

自分自身がその様に変化していく中で、自然に相手も変わっていくのである。

例えば思わぬ方向に育った子供を見て、子供だけを直そ

うとするのは間違いである。

何よりも先ず、その様に育てた自分の育て方の間違いに気付き、子供に心から詫び、自分の考え方や行動のありかたを改め、今までと違った環境を自分と子供に与えてこそ、良い子に育っていくのである。

ただし、詫びるといっても、それは「すまなかった。申し訳ない、赦してくれ」等と言って口先だけで詫びることではない。

本当のお詫びをするという事は、「自分の行動を変える」という事である。行動を伴わない口先だけのお詫び等と言うものは、自分を偽り、相手を欺くものであって、十害あって一利なしである。

子は親の鏡であり、子供の姿というのは、親の問題を映し出し、見せてくれているのである。

子供の苦労は親の苦労であり、また子供の喜びは、即、親の喜びである。

そういう家庭環境を作る様に努めなければいけない。

親子だけでなく、目の前にいる人というのは鏡であり、相手を通して誰でも人は、自分自身の内面を見ているのである。

自分が至らないから、相手が至らないところを見せてくださるのであり、自分が素晴らしくなれば、相手も必ず素晴らしい面を見せてくれるようになる。

たとえば「世の中は、汚い」などと思っている人は、やはり自分の内面のどこかに汚い面があるはずであり、「世の中、捨てたものでない」と思っている人は、その人の中に、捨てたものでない何らかの素晴らしい面があるという事である。見ているもの接しているものそれら全ては、自分の内面を表わしているのである。

自分の見方、考え方、生き方を変える事で、必ず相手も自然に変わってくるのである。だから相手を変えようとする必要など、どこにもない。変えるべきは自分であり、自分を育てる為に相手の方が居て下さり、そういう姿を見せて下さっているのである。

えてして至らない人ほど他人の欠点に目がゆき、それらをあげつらったり非難批判しながら、自分自身は一向に変わろうとしないものである。

全ての全てを師と仰げるような人こそが、益々幸せになれる人であり、また接する人をも幸せに導く事のできる人である。

特に目下の人からも学ぼうとするような心の姿勢の人は、間違いなく向上してゆく人である。

〔ご案内〕

次回十二月、及び翌年一月は、誠に勝手ながら都合により、お休みとさせて頂きます。

勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。

編集発行人　もとはこちら会　資料編集部　北原友也
専用ＨＰ　http://www.motoha-kochira.com
mail:　data3@motoha-kochira.com
TEL　０７３・４６１・６３００